

<b>Title</b>	カントにおける超越概念
<b>Author</b>	仲原, 孝
<b>Citation</b>	人文研究. 58 卷, p.31-48.
<b>Issue Date</b>	2007-03
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科
<b>Description</b>	富田和暁教授：毛利正守教授：山崎弘行教授：松村國隆教授：小林標教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

# カントにおける超越概念

仲 原 孝

本論文は、カントが用いる "transzendental" という語を「超越論的」と訳す現在の慣行に異議を提起し、この訳語が重大な誤訳であること、この語は「超越的」と訳すのが最も妥当であることを論じている。この結論を導くために、本論文ではまずこの訳語を最初に提案した九鬼周造がこの訳語を妥当と考えた根拠を検討する。続いて『純粹理性批判』の序論で提示されているこの概念の定義を、従来多くの研究者が誤読していたことを指摘し、この定義の真の意味を明らかにする。カントはスコラ哲学からヴォルフ学派へと継承されてきた存在論の伝統をはっきりと意識しており、「対象一般」ないし「存在者としての存在者」についての認識を「超越的」と呼ぶ伝統的な用語法を、『純粹理性批判』でも継承している。「超越『論』的」という訳語は、対象一般への「超越」について「論」ずる認識批判的認識を表わすには確かに適しているが、対象一般への超越そのものを「超越的」と呼ぶ『純粹理性批判』の多くの箇所での用例を正しく訳出することができない。この問題を解決するには、原語を何の工夫もせず直訳した「超越的」という訳語を用いるのが結局は最も有効なのである。

## 1. 序 論

カントが『純粹理性批判』で用いている "transzendental" という語を、現在では日本語で書かれた翻訳や研究書はほとんど「超越論的」と訳している。戦前には天野貞祐による『純粹理性批判』の翻訳を始めとして「先験的」と訳されるのが一般的だったこの語が、一転して「超越論的」と訳されるようになった経緯をここで詳しくたどる余裕はないが、少なくとも間違いないと言えることは、フッサールやハイデガーを始めとする現代の現象学派の哲学者たちが transzendental という語を自己自身の立場を表わすための決定的に重要な語として用いたのを翻訳する必要に迫られたことが、この訳語変更の最大の理由の一つをなしているということである。この語を「超越論的」と訳すことを最初に提案した九鬼周造は、このように訳す根拠を説明した文章の中で、次のように述べている<sup>1)</sup>。「Husserl に従えば transzendental には経験的なものと a priori なものとの二種がある。即ち transzendental は経験的でもあり得る。〔……〕これらの場合に transzendental を先験的と訳しては何のことも全く意味が分からなくなる」。「Husserl の用語法では transzendental を先験的と訳しては全く意味をなさない。語原に即して超越論的とさえ訳して置けば差支ないのである」。「Heidegger の用語法にあっても transzendental は Transzendenz と非常に密接な関係を有っている。

transzendental を先験的と訳してしまっは何のことか分からぬ」。

言うまでもなくこれは、フッサールやハイデガーのテキストに対する訳語を決定する根拠ではありえても、カントのテキストに対する訳語を決定する根拠ではありえない。しかしもちろん九鬼は、フッサールやハイデガーに関する訳語の検討から即座にカントに関する訳語を決定するなどという暴挙を行なっているわけではない。彼は、カントの訳語としても「超越論的」という訳語が妥当であることを示す根拠を挙げている<sup>2)</sup>。まず彼は、『純粹理性批判』第2版(B25<sup>3)</sup>)で提示されている transzendental の定義を次のように訳す。「対象にではなく、むしろ対象を我々が認識する仕方——それが先天的に可能なるべき限りに於て——に一般に関与するところの総ての認識を余は transzendental と名づける」。ここから九鬼は次のように結論する。transzendental とは「『対象を我々が認識する仕方に関与するもの』である。それはもちろん『対象そのものに関与するもの』と区別されている。『対象そのものに関与するもの』が transzendent と呼ばれるに対して『対象を我々が認識する仕方に関与するもの』は transzendental と名づけられたのである」。

このように transzendent と transzendental とは区別されつつも「本質的な密接な関係」をもつ概念として定義されている以上、transzendent (超越的) との関係を見捨てて transzendental を「先験的」と訳すのは適切ではない、と九鬼は言うのである。たしかに、同一の語源から派生したこの二語を、まったく無関係な日本語で訳すべきでない、という指摘に関する限り、九鬼の主張は完全に正当である。しかしだからといって、transzendental を「超越『論』的」と訳するのがよいという彼の主張にまで無条件に同意してよいわけではない。彼はカントによるこの概念の定義を上のように理解した上で、「対象そのものに関与するもの」を「超越的」と呼ぶのなら、「対象の認識に関与するもの」は「超越性を認識の問題とする」という意味で「超越論的」(超越認識的<sup>4)</sup>)と訳するのが適切だ、と言う。しかし我々は以下において、このような理解はカントが行なっている定義の真意を完全に誤認していること、transzendental を「超越論的」と訳すことによってカントの哲学の真意は決定的に隠蔽されてしまうこと、を明らかにしたい<sup>5)</sup>。我々は、transzendental を「超越的」と訳す高坂正顕の訳語選択<sup>6)</sup>を支持し、transzendent は「超絶的」と訳すことで、両者の区別および関係を明示するのが最も妥当であると考え。その根拠については本文の最後に明示されるが、根拠を示す前であっても本論文全体でこの訳語を用いていることをあらかじめ断わっておく。

## 2. 『純粹理性批判』第1版序論における定義の検討

九鬼に限らず、transzendental という概念の意味を検討しようとする人の多くは『純粹理性批判』第2版序論での定義からこの概念の意味を読み取ろうとする。しかし、言うまでもなくこの定義の文言は、第1版序論での定義の文言に修正を加えることで初めて成立したもので

ある。この基本的な事実を見失うことは、第2版の定義の構文をすらすら誤って捉えるという帰結を不可避的に生ずるのである。そこで我々は、第1版序論の定義から順に、その意味を正確に読みとっていかう。

まず第1版序論の定義の原文と翻訳を示す。

Ich nenne alle Erkenntnis transzendental, die sich nicht so wohl mit Gegenständen, sondern mit unsern Begriffen a priori von Gegenständen überhaupt beschäftigt.

私は次のようなすべての認識を超越的と名づける、すなわちそれは、対象一般に関わるよりはむしろ、対象一般について我々がもつアプリアリな概念に関わる、そういう認識である。(A11-12)

(a) このドイツ語原文を理解する上でまず注意すべき点は、“überhaupt”を単に直前の“Gegenständen”だけにではなく、一度目の“Gegenständen”にもかかっているものとして読まなければならないことである。カントは、並列関係にある文の両方に同一の語が重複して出現するのを避けるために、一方を省略して、結果的に非常に読みにくい構文を作ってしまう癖をもっているが<sup>7)</sup>、上の文もその一例である。

次に、ヒンスケが指摘しているように<sup>8)</sup>、“nicht so wohl A sondern B”は「AではなくてB」という意味ではなく、「AよりはむしろB」という意味に解さなければならない(英語の“not so much A as B”に相当する)。つまりカントはこの定義で、「対象一般に関わる認識」を「超越的」と呼ぶ用語法を決して全部否定してはいないのであり、ただ自分としては「むしろ」「対象一般について我々がもつアプリアリな概念に関わる認識」の方を「超越的」と呼ぶことにする、と彼は言っているのである。〈AよりはむしろBを私は「超越的」と名づける〉という言い方は明らかに、この概念がカント以前には一般的にAという意味で用いられていたことを念頭に置いた上で、この伝統を自分は決して拒否するわけではないが、しかし自分としてはむしろこの概念をBという意味で用いる方がよいと考える、という主張を含意している。そこで、「超越的」という概念が従来いかなる意味で用いられてきたとカントが理解していたか、そして、カントはなぜこの用法をそのまま継承せず、概念の意味を変更する必要があると考えたのか、ということがここで当然問題となる。

(b) まず、この概念のカント以前の意味について考えておこう。カント以前には“transzendental”と“transzendent”とは同義的に用いられていたこと、そしてスコラ哲学以来、「範疇」(Kategorien)の普遍性を「超越」する普遍性をもつ述語が transscendentia ないし transscendentalia (ここではいずれも「超越疇」と訳す)と呼ばれて形而上学および神

学の重要な主題とされてきたこと、このことはよく知られている<sup>93</sup>。そして、若きカントの思想形成に最も大きな影響を与えたヴォルフ学派の思想はスコラ哲学の多くの要素を取り入れており、カントの「超越的哲学」はこのヴォルフ学派を介してスコラ哲学の超越論思想を継承発展したものと見なすべきである、と主張する研究者は多い<sup>94</sup>。しかしこうした見解に対してヒンスケは、「超越的」という概念はすでにヴォルフにおいて中世の超越論思想との直接的な関係を失っていたこと、ヴォルフは形而上学の特殊な一部門にすぎない世界論に「超越的世界論」(cosmologia transscendentalis) という名称を与えることで、「超越的」という概念を存在論との結びつきから切り離してしまったこと、その結果としてこの概念は18世紀には「概念に似て非なるもの」(ein Unbegriff) と化してしまっていたこと、などを指摘して反論している。カントが『純粋理性批判』第2版になって初めて超越論思想に言及している(B113-116)のは、実際に彼が第2版を執筆する時まで超越論思想についての完結した理解をもっていなかったからなのだ、とヒンスケは言う<sup>95</sup>。

これらの見解のいずれが妥当かを一義的に決定することは、カントの遺稿の年代決定の問題もからむ困難な課題であり、ここで一朝一夕に確定的な答を出すことはできない。しかし、本稿の主題である『純粋理性批判』における「超越的」概念の意味の確定という課題に関する限り、こうした発展史的研究に関与することは必ずしも必要ではない。なぜなら、ここでの問題は、「超越的」という概念が伝統的にいかに用いられてきたと『純粋理性批判』において理解されているかということだけであり、実際にカント以前ないしカントと同時代にこの概念がいかに用いられていたか、そしてカントがいつ、いかなる過程を経てこの概念を受容したか、ということではないからである。そして、『純粋理性批判』においてカントがこの概念の従来的な意味をいかに理解していたかは、上に引用した序論の定義にすでに明瞭に表われている。彼は、「対象一般に関わる認識」を「超越的」と呼ぶのが従来一般的な用法であったと考えていたのである。

「対象一般」(Gegenstände überhaupt)あるいは「物一般」(Dinge überhaupt)という語は、ヴォルフ学派において「存在者としての存在者」(ens ut ens)を表わすドイツ語として頻繁に用いられていたものである。実際ヴォルフはラテン語の ens をドイツ語著作では Ding という語で表わすのを常としていた<sup>96</sup>。『ドイツ語の形而上学』(Deutsche Metaphysik)と通称されているヴォルフのドイツ語による主著の正式な表題は、『神、世界および人間の魂と、そして一切の物一般とに関する合理的思想』であるが<sup>97</sup>、この表題が特殊形而上学(metaphysica specialis)の主題である「神・世界・魂」と、一般形而上学(metaphysica generalis)の主題である「存在者としての存在者」とを列挙したものであるの言うまでもない。そして彼は『ドイツ語の形而上学』に対して自身で書いた註解において、「超越的真理」(Veritas transscendentalis)を「物一般の属性」と規定しており<sup>98</sup>、「超越的」という概念を明らかに「物一般に関わる」という意味で用いているのである。

「対象一般に関わる認識」を「超越的」と呼ぶのが従来一般的だったとカントが考えた時、以上のようなヴォルフ学派の用語法を念頭に置いていたのは明らかである。ヒンスケの言うとおり、「一」「真」「善」等の述語が範疇を超越する普遍性をもった「超越疇」であるというスコラ哲学の思想は、『純粹理性批判』の用語法とは一致しない。なぜなら、スコラ哲学における超越疇は「範疇を超越する」ところにその本質を有するのに対して、カントはほかならぬ「範疇」そのものを「対象一般の概念」と定義し（B128, cf. A93/B126, A245）、単なる論理的概念と区別して「超越的概念」と呼び（A299/B356）、範疇表のことを「超越的な表」（B115）と呼んでいるからである。カントにおいては範疇そのものがスコラ哲学のいわゆる超越疇に相当するのである。だからこそ彼は『純粹理性批判』第2版に書き加えた超越疇思想についての論評で、範疇のほかに「対象のアプリオリな概念」（つまり対象一般の概念、つまり超越疇）を考えるのは不条理だ、と批判しているのである（B113）。

(c) すでに確認されたとおり、カントは「超越的」という概念の従来的な意味を全面的に拒否するとは決して言っていない。実際、『純粹理性批判』におけるこの概念の用例の多くは、こうした従来的な意味でこの概念を用いたものと解することで初めて理解可能になる。ここでは網羅的に検討している余裕はもちろんないが、いくつかの代表的な用例について簡潔に検討しておくことにしよう。

カントは時間の「経験的事象性」（empirische Realität）と「超越的観念性」（transzendente Idealität）について次のように説明している。

時間は現象に関してのみ客観的妥当性をもつ。なぜなら現象とはすでに我々が我々の感能の対象として受け入れている物だからである。しかし、我々の直観における感性が捨象され、したがってまた我々に固有な表象様式が捨象されて、物一般について語られる場合には、時間はもはや客観的ではなくなる。（A34-35/B51）

明らかにここでは「現象に関して客観的妥当性をもつ」という部分が「経験的に事象的」ということの説明であり、「物一般について語られる場合には客観的ではない」という部分が「超越的に観念的」ということの説明になっている。カントがここで「超越的」という概念を「物一般に関わる」というヴォルフ的な意味で理解しているのは明らかである。範疇の「超越的使用」（transzendentaler Gebrauch）という言い方についてもまったく同様である。

これらの純粹悟性概念は、単に経験的にしか使用されないのか、それとも超越的にも使用されるのか。つまり、それは可能的経験の制約としてアプリオリに現象に関係するにすぎないのか、それとも物一般の可能性の制約として対象自体そのものにまで（我々の感性になに

がしか制限されることなしに) 拡張されうるのか。(A139/B178)

これらの箇所において「物一般」とは、「経験の対象である限りの物ではなくて、およそ存在する物一般」ということを意味している。したがって、「物一般」に空間や時間や範疇を適用しようとするのは、いわゆる「物自体」にまでこれら表象を適用しようすることを含意する。だからカントは、例えば空間の超越的観念性を説明するのに、「我々がそれを物自体そのものの根柢に存するものと想定するや否や無となる」という言い方をし(A28/B44)、範疇の超越的使用を説明するのに、「経験の限界を超え出る使用」(A296/B353)という言い方をするのであるが、こうした規定を見て従来の大半の研究者は、ここでカントは自分自身で厳密に区別したはずの「超越的」(transzendental)と「超絶的」(transzendent)とを混同してしまっている、と非難してきた<sup>15)</sup>。しかしこれは、カントが与えている規定の目先の表現だけを見て、事柄の本性を見失った非難である。

範疇の「超越的使用」とは、範疇を実際に経験の限界を超えて物自体に対して適用することでは決してなく(それは人間には原理的に不可能なことである)、ただ範疇を経験の限界を超えて使用していると思いついでいる状態を意味しているにすぎない。カントが「超絶的」原則と呼んでいるのは、実際に経験の限界を超出して無制約者へと向かうことを命ずる理性の原則のことであるから(A296/B352-353)、本当に経験の限界を超出するわけではない範疇の超越的使用を「超絶的使用」と呼ぶことこそ事態の本質に反している。範疇の超越的使用とは、経験の限界を「超えて」範疇を使用することでは決してなく、ただ経験の限界に「依存しないで」(つまり経験の限界を無視して)範疇を「物一般」に適用しているかのように思い込むことである(cf. A614/B642)。カントが時に「超越的」という概念を「アプリアリ」(経験に依存しない)とほとんど同義に見えるような仕方で用い、あるいは説明することがある(A94, A266/B322, *Prolegomena* 204 Anm.)のは、「物一般に関わる」というこの概念の従来の意味からの帰結なのである。

しかし、「超越的」概念の基本があくまで「物一般に関わる」というところにある限り、この概念は「アプリアリ」と完全に同義となることはありえない。例えば「人間は動物である」といった分析的判断は、アプリアリな真理ではあるが、単なる概念の意味内容について判断しているだけで、実在する物についての判断ではないから、カントは分析的判断のことを「超越的真理」や「超越的判断」などとは決して呼ばない。「超越的」と呼ばれうるのは、アプリアリでありながらも「物」(存在者、つまり現実に実在する対象)に関わるような認識だけである。「一般的論理学」が一切の対象を捨象して単なる形式的規則という意味でのアプリアリな規則を説明するのに対して、「超越的論理学」は「アプリアリに対象に関係する」思考の起源や範囲や客観的妥当性を説明する、とカントが言うのは(A57/B81)、「超越的」という概念が基本的に「物一般に関わる」ということを意味する概念であり、そして「物一般に関わ

る」とは「アприオリに対象に関わる」ということに等しいからなのである。

このように考えてくれば、「超越的論理学」や「超越的演繹」といったカント自身の体系の各部分の表題に付与される場合も含めて、「超越的」という概念の用例の少なくとも大多数において、「対象一般に関わる」「アприオリに対象に関わる」という意味がこの概念の土台をなしていることが見えてくる。『純粹理性批判』序論におけるこの概念の定義において、カントがこの概念の従来の意味を全面否定していないのは、実際にカント自身が一貫してこの概念を従来の意味を土台として用いているからなのである。

しかし、一口に「対象一般に関わる」といっても、例えば範疇の「超越的使用」と「超越的論理学」とでは、対象一般に対する関わり方は根本的に異なっていることに注意する必要がある。範疇の超越的使用においては、範疇は対象一般に対して適用されていると思込まれているだけで、実際には対象一般に対するいかなる現実的關係も成立していない。ところが超越的論理学は、範疇の適用範囲を経験の対象一般に制限することによって、客観的妥当性をもった認識を成立させる。対象一般に対する仮象的關係と現実的關係という、こうしたまったく異質な二つのものを、「超越的」という同一の概念によって表示するのは、概念を二義的に使用していると非難されてもやむをえないのではないか。我々は次にこの問題について考えるために、『純粹理性批判』第1版序論における「超越的」の定義でカントが従来の意味と対比して新たに導入している意味について考察しなければならない。

(d) カントは第1版序論のこの定義で、「対象一般に関わる認識」よりはむしろ「対象一般について我々がもつアприオリな概念に関わる認識」を自分は超越的と呼ぶ、と述べている。すでに指摘されたとおり、カントは「範疇」ないし「純粹悟性概念」を「対象一般の概念」(B128, cf. A108)と規定しているから、序論の定義にある「対象一般について我々がもつアприオリな概念」とは、直接的には範疇のことを意味していると解される。しかし、カントが時に空間と時間の純粹直観のことを「概念」と呼ぶことがある(超越的感性論の各節の表題、さらに A85/B118 参照)ことから伺われるように、彼は「概念」という語をごくゆるやかに、「表象」や「認識」というほどの意味で用いる場合があるのも確かである。もし序論定義における「概念」という語をこうした意味で解しようとすれば、この定義は「〈対象一般に関わるアприオリな認識〉に関わる認識」を「超越的」と呼ぶ、と定義していることになる。序論のこの定義を含む箇所は、単に範疇論だけについて論じているのではなく、「超越的哲学」全体の理念について論じているのであるから、ここは後者の理解の方が妥当だと考えられる。

そうだとすれば、カントはここで、従来「超越的」と呼ばれてきた認識(対象一般に関わるアприオリな認識) についての認識をむしろ「超越的」と呼ぶ、と宣言していることになる。もう少し詳しく言えば、従来は対象一般を直接的に認識するような認識が「超越的」と呼ばれてきたが、それに対して自分はむしろ、そういう認識がいかにして可能であり、その妥当性の



限界はどこにあるか、といったことについての認識の方をむしろ「超越的」と呼ぶことにしたい、と彼はここで述べているのである。

このような意味の変様がなぜ必要だったのかは、範疇を直接的に対象一般に適用する「超越的使用」が単独では認識の仮象をしか作り出さないことを考えれば、容易に理解できる。範疇を対象一般に適用することは、この対象一般が無制限の対象一般ではなく、経験の対象一般である場合に限って客観的妥当性をもつことができる、とカントは考える。つまり、従来の意味で「超越的」な認識は、この認識の妥当しうる範囲を明らかにする認識批判的な認識に裏打ちされて、初めて仮象ではなく客観的妥当性をもった認識として成立しうるのである。したがって、カントが「超越的」という概念を積極的な概念として自己の思想のうちで用いようとする以上は、それ自体では認識の仮象をしか意味しえない従来の意味のままでこの概念を用いることはできないのであり、従来の意味で超越的であるような認識に客観的妥当性を与える認識批判的な認識の方をむしろ「超越的」と呼ぶことが必要となるのである。要するに、カントが「超越的」の意味を「対象一般に関わる認識」から「認識批判的認識」へとシフトさせたのは、従来は〈制約されたもの〉の方に与えられていた名称を、〈制約するもの〉の方へと移し置いたのであり、いわば「命名はより優越したものから」(a potiori fit denominatio) という原則に従ったものと見ることができる。

しかし、この概念の従来の意味を残したままで、こうした新たな意味をこの概念に与えることは、大きな長所ももつ反面、無視できない矛盾をも抱え込むという帰結を生じることになる。まず矛盾の方から指摘しよう。カントのように、範疇を無限定の対象一般に対して使用することを「超越的」使用と呼ぶと同時に、このような範疇の使用が客観的妥当性をもたないことを明らかにする認識を「超越的」論理学と呼ぶ、ということをしてしまうと、例えば「超越的論理学が可能になることによって範疇の超越的使用が不可能になった」という命題を承認しなければならないことになる。この命題が、「超越的認識が可能になることによって超越的認識が不可能になった」というに等しい自己矛盾を含んでいるのは明らかである。このような自己矛盾した概念使用を行なうことで、カントは自分の哲学の本質が妥当に理解される余地をみずから塞いでしまっている。なぜなら、この矛盾に気づいた者はほとんど必然的に、範疇の「超越的使用」を始めとする用例を、カントの軽率な誤りと見なして黙殺し、「超越的」が「認識批判的」という意味で用いられているように見える箇所だけをこの概念の正当な用例と見なす、という態度をとることになるからである。しかしこのような態度によって、カントの「超越的」概念が一面で従来の用法を直接に継承しており、あくまで「対象一般に関わる」という意味を基底として成立しているという事実が、完全に隠蔽されてしまうことになる。

しかしこの矛盾は、以上のような否定的な意味あいしかもたないわけではない。この矛盾にもかかわらず「超越的」概念が一貫した基底的な意味を保持しつづけていることを我々が見失いさえしなければ、この矛盾をカントの積極的な洞察の表明として受け取ることもまた可能で

ある。すなわち、カントは自分独自の認識批判的な意味をこの概念に新たに与えながら、しかもこの概念の従来の用法も抹消せずに残しておくことによって、自分の哲学が伝統の単なる転覆を目指すものでは決してなく、まさに伝統を積極的に継承し、確たる土台の上に初めて根拠づける哲学なのだということを、アピールしようとしているのだと解することができるのである。

すでに指摘されたとおり、ヴォルフ学派の意味で「超越的」な哲学とは、「物一般」（つまり存在者一般）の属性を解明する「一般形而上学」ないし「存在論」を意味している。カント自身も自分の形而上学の体系構想を提示する際に、「超越的哲学」（Transzendentalphilosophie）を、「与えられるであろう客観を想定することなしに対象一般に関係する一切の概念や原則の体系（存在論）」と定義している（A845/B873、強調は引用者）。明らかにカントは超越的哲学を、「存在者としての存在者」（on he on）の本質を解明するというアリストテレス以来の「第一哲学」<sup>91</sup>の理念を継承する学として理解している。ただし彼は、従来最も根本的な学と見なされてきた第一哲学よりもさらに根本的な位置に、「純粹理性の批判」を置くことを構想する。「批判」とは、超越的哲学の「全計画の見取り図を建築学的に、つまり原理からして描く」（A13/B27）学であり、超越的哲学の「予備学」（Propädeutik, A841/B869）である。なぜなら、純粹理性の批判によって概念や原則の使用範囲に限界が設定されなかったならば、超越的哲学はただちに概念の「超越的使用」となるからであり、その意味で超越的哲学は「超越的批判」（A12/B26）によって支えられて初めて確固とした学として成立しうるからである。伝統的な第一哲学の全体を「批判」の上に乗せることによって確立しようとするというこうした伝統との連続性は、第一哲学を「超越的哲学」と呼び、その上台を「超越的批判」と呼ぶという用語の一貫性によって、明瞭に表現されている。無論だからといって、上で指摘されたような自己矛盾が帳消しになるわけではないが、我々は目先の矛盾を非難するだけに終始してこの矛盾が含意する積極的洞察を見失うという誤りに陥らないよう、十分に注意する必要がある。

### 3. 『純粹理性批判』第2版序論における定義の検討

以上で我々は、『純粹理性批判』第1版の序論における「超越的」概念の定義についての検討を終えて、次に同書第2版の序論における定義の検討に移ろう。第2版ではこの定義は次のように書き改められている。

Ich nenne alle Erkenntnis transzendental, die sich nicht so wohl mit Gegenständen, sondern mit unserer Erkenntnisart von Gegenständen, so fern diese a priori möglich sein soll, überhaupt beschäftigt.

私は次のようなすべての認識を超越的と名づける、すなわちそれは、対象一般に関わるよ

りはむしろ、対象一般について我々がもつ認識様式に、しかもこの認識様式がアブリアリに可能であるべき限りにおいて、関わるような、そういう認識である。(B25)

第1版の文と第2版の文との違いは、sondern 以下の "mit unsern Begriffen a priori von Gegenständen überhaupt" という部分が "mit unserer Erkenntnisart von Gegenständen, so fern diese a priori möglich sein soll, überhaupt" に書き改められていることである。もう少し詳しく言えば、(a) まず "Begriffe" という語を "Erkenntnisart" という語に変更し、(b) さらに、第1版では単に "a priori" と一言で言われていたものを、"so fern diese a priori möglich sein soll" という挿入節に変更した、という2点が、この改変の実質的な内容のすべてである。

第2版の文がこうした改変の結果として成立したことを考えれば、"überhaupt" を直後の "beschäftigt" にかけて「一般に関与する」と訳す九鬼の訳は誤りであること、"überhaupt" は挿入節をとびこしてその前の "Gegenständen" にかけて「対象一般」と訳さなければならないこと、は明らかである。なぜなら、"so fern" 以下の挿入節は、もともと "Gegenständen überhaupt" と続けて書かれていたところにいわば割り込む形で、文字通り「挿入」されたものだからである。

では、カントはなぜ、もともと一連の句をなしていた二語の間に挿入節を割り込ませるなどという不自然なことをしたのだろうか。明らかにそれは、"Gegenständen überhaupt" の "überhaupt" が、直前の "Gegenständen" だけではなく、一度目の "Gegenständen" にも同時にかかっているという意識があったから以外ではありえない<sup>19)</sup>。実際、もし "Gegenständen überhaupt" の後に挿入節を置いて、"die sich nicht so wohl mit Gegenständen, sondern mit unserer Erkenntnisart von Gegenständen überhaupt, so fern diese a priori möglich sein soll, beschäftigt" と書いたとしたら、so fern 節が直前の "Erkenntnisart" をしか説明していない以上、間にはさまれた "überhaupt" だけが一度目の "Gegenständen" にもかかるようには読めなくなってしまう。それで、挿入節を "überhaupt" の前に置き、sondern 以下だけに関係する文句は "überhaupt" の前に集めてしまうことで、"überhaupt" が二つの "Gegenständen" に同時にかかりうるようにしたのである。我々はすでに第1版の定義文の検討において、"überhaupt" を二つの "Gegenständen" の両方にかけて読まねばならないと主張したが、カントが第2版で行なった改変のやり方は、まさしくこの読み方が正しかったことを裏づけているのである。そして、我々が本稿の冒頭で、第1版と第2版とを両方考慮に入れなければ第2版の文の構文を読み誤ることになる、と言ったのは、第2版だけしか読まない者は九鬼のように "überhaupt" を "beschäftigt" にかけて読んでしまうのが必至であるということを指摘したのである。

第2版の文の構文上の問題点について指摘すべきことはこれだけである。次に、上で (a) (b)

の2点にわたって指摘した実質的な改変内容について、順次検討して行こう。

(a) まず、「概念」という語が「認識様式」という語に改められているという点についてであるが、これは実質的な意味内容の変更ではなく、曖昧であった表現をより正確なものに修正したのにすぎないと見るのが妥当であろう。我々はすでに(2.d 参照)、第1版の定義における「概念」という語が、厳密な意味での概念を意味するのではなく、「表象」や「認識」という意味も含んだゆるやかな広い意味で用いられていると解する必要があることを指摘した。第2版で「概念」を「認識様式」に改めたのは、「概念」という語を「直観」や「認識」などと区別された厳密な意味で解した場合に、第1版の定義が「超越的な」認識の範囲を不当に狭める定義となってしまうことに気づいたカントが、これをより正確な語に置き換えたのだと考えられる。その限り、この改変に関して特に検討を要する問題は何もないと考えてさしつかえない。

(b) 次に、「アприオリな」という一句を「この認識様式がアприオリに可能であるべき限りにおいて」という節に書き改めた理由について考えてみる。第1版の文は、対象一般に関わるアприオリな概念ないし認識というものが実際に成立していることを最初から自明の前提として書かれているのに対して、第2版の文は、対象一般に関わるアприオリな認識は成立可能である「べき」ではあるが、必ずしも実際に成立しているとは限らない、という考え方に基いて書かれている。第2版での改変がもたらした最大の意味上の相違は、ほかならぬこの点にある。

しかし、対象にアприオリに関わる認識が常に必ず成立しているわけではなく、むしろ純粋理性の批判を欠いていた従来<sup>1</sup>の形而上学においては終始一貫して不成立の状態に留まっていたという思想それ自体は、すでに『純粋理性批判』第1版でも、特に「超越的弁証論」において、詳細に論じられていた思想である。第2版での定義の文言の改変は、対象にアприオリに関わる認識があたかも常に必ず成立していると言っているかのように読まれる恐れのある第1版の文言を、より正確な表現に改めたまでのもので、第1版には存在しなかった新しい考え方を導入するものではまったくない。

このように見てくれば、全体として第2版序論での定義の文言の改変は、誤解の余地のある表現をより厳密な表現に改めたという域を一步も出るものではないことがわかる。しかも、この改変によって定義の構文が不明瞭になってしまい、第1版の定義と詳細に比較検討しない読者には「対象一般」という決定的に重要な句が読み取れなくなってしまった、という重大な欠陥が新たに入り込んだことを考えれば、個々の表現が厳密化されたことをもって第2版の定義の方が優れているとは一概に言いきれないことも事実である。要するにこの定義は、第1版と第2版とを両方読みあわせることで初めてその十全な意味が読み取られるものであり、第2版

しか考慮しないという態度で望む限り、この定義の真意はほとんど必然的に見失われてしまうのである。

#### 4. カントにおける超越概念

transzendental という概念に対して『純粹理性批判』序論で与えられている定義に関する以上の検討は、本稿の冒頭で提起されたこの概念の訳語の問題について、いかなる結論をもたらすだろうか。

(a) 九鬼周造がこの概念を「超越論的」と訳すべきだと考えたのは、 $\alpha$ ) 第2版序論の定義だけに注目し、 $\beta$ ) しかもこの定義を、「対象にはなく、対象を我々が認識する仕方に関する認識を transzendental と呼ぶ」と訳し、 $\gamma$ ) さらにこの定義を解釈して、「『対象そのものに関与するもの』が transzendent と呼ばれるに對して『対象を我々が認識する仕方に関与するもの』は transzendental と名づけられた」と理解する、という論理に基づいているということを、我々は本稿冒頭で確認した。主観から対象への関係を「超越的」と呼ぶなら、主観が対象へと関係する仕方について認識し論ずる立場は「超越論的」「超越認識的」と訳するのが妥当である、というのが九鬼の主張であった。

しかし、本稿のこれまでの検討は、九鬼の主張を支える以上3つの点が、いずれも重大な誤りを含んでいることを明らかにした。すなわち、 $\alpha$ ) 第2版序論の定義は第1版からの改変によって成立したことを念頭に置くことによって初めて構文的にも意味的にも正しく理解できるのだということ。 $\beta$ ) この定義は、「対象一般に関わるよりはむしろ対象一般を我々が認識する仕方に関わる」と訳さなければならないこと。カントは「対象一般に関わる」存在論的認識を transzendental と呼ぶ従来の用語法を、決して全部否定していないどころか、カント自身の用例の少なくとも大半はこの従来の意味を念頭に置くことで初めてその一貫性が理解できるのだということ。 $\gamma$ ) カントが transzendent と呼んでいるのは、主観から対象への関係のことでなく、経験の限界を現実を超出することを命ずる理性の原則の性格のことであるということ。以上のことが、本稿の検討によって明らかにされた。

したがって、transzendental を「超越『論』的」と訳すべきだという九鬼の主張には、まったく根拠がないと言わなければならない。「超越論的」という訳語が原文の意味を比較的忠実に表わすことができるのは、transzendental という語がほぼ完全に「認識批判的」という意味に特化して用いられている箇所だけであり、この語が「対象一般に関わる」という基底的な意味を表面に出して用いられている箇所では、「超越論的」という訳語は原語の意味とはかけ離れた意味を読者に思い浮かべさせてしまう。例えば、範疇の transzendentaler Gebrauch とは、範疇を「対象一般に対して使用すること」(批判哲学に基づいて使用を経験の対象だけ

に限定するということをしないこと)を意味するが、これを「超越論的使用」と訳すと、「超越について論ずる批判哲学の立場に基づいて使用する」というような、およそ正反対の意味が表われてきて、それこそ「何のことか分からぬ」ことになる。そもそも範疇の *transzendentaler Gebrauch* とは、認識論を欠如した範疇使用を表わすために用いられている概念であるのに、これを「超越論的使用」と訳すことは、原語の意味を表わすどころか逆に隠す翻訳を行なうことになってしまう。同様に、空間と時間の *transzendente Idealität* とは、空間と時間が「対象一般に関わるものと考えられた時には客観的妥当性を失う」ということを意味する概念であり、従来の *Transzendentalphilosophie* (形而上学) が行なってきた空間時間解釈の無効性を表わすための概念であるが、これを「超越論的観念性」と訳すと、「認識について論ずる批判哲学の立場から見れば空間と時間は主観的観念にすぎない」という、カント自身の立場を積極的に表明する概念と解されることになり、やはり正反対の意味が表にあらわれてくることになる。

原語の意味を不十分にしか表現できないのは、あらゆる翻訳が背負わねばならない宿命であるが、原語の意味と正反対の意味を表わすような翻訳は、明らかな誤訳であると言わざるをえない。このような誤訳を用いてカントの思想について論ずる習慣が定着していることで、カントの思想を的確に理解する道が塞がれてきたといっても過言ではない。

(b) では、かつて一般的であった「先験的」という訳語を復活させることで、以上のような問題は解決されるだろうか<sup>18)</sup>。 *transzendental* という語の基底をなす「対象一般に関わる」という意味は、「アприオリに対象に関わる」と言い換えることもできるということを我々はすでに指摘した。「先験的」(経験に先立つ、アприオリな) という訳語が、この語の基底的な意味の少なくとも半面を忠実に表わしているのは間違いない。そして、この「先」という語を、「経験の可能性の制約として先立つ」という意味のみならず、「経験に依存しない」「経験と無関係な」という意味で解しうる限りにおいて、空間時間の「先験的観念性」という語や範疇の「先験的使用」という語も、原語の意味をまずまず忠実に表わしていると言うことができる。反面、「先験的」という語が表面上は「認識批判的」という意味をまったく含んでいないという点に問題を見出すひともいるかもしれない。しかしそれは *transzendental* という原語自体についても言えることであり、「先験的」という訳語の側が含む問題点ではない。むしろ、語義上は「超越的」という意味しかもたない語に「認識批判的」という意味を新たに与えるところにこそ『純粹理性批判』序論の定義の意味があるのであって、この語を最初から認識批判的という意味をもつ日本語で訳してしまったら、序論の定義の日本語訳は無意味な同語反復にしかならず、この語の従来的な意味を根本的に捉えなおそうとするカントの意図は、翻訳には表わされないことになるだろう。

「先験的」という訳語は、『純粹理性批判』における *transzendental* という語の大多数の

用例の意味をかなりの程度にまで忠実に再現しうる、決して悪くない訳語である。にもかかわらず、我々がこの訳語を支持しない理由は、カントが終始一貫して念頭に置いているこの語の カント以前の意味を、「先験的」という語は十全に表わすことができないからである。すでに述べられたとおり、スコラ哲学において *transscendentalia* とは、範疇の普遍性を「超越」する普遍性をもつ述語を意味しているのであって、決して「経験に先立つ」述語を意味しているのではない。このような述語についてカントが論評している箇所 (B113-114) を訳すのに、*transzendente Prädikate* を「先験的述語」と訳したのでは、スコラ哲学のどの思想について論評しているのか、読者は理解に苦しむことになる。同様に、カントが一般的論理学と *transzendente Logik* とを区別しているのは、ヴォルフが「論理的真理」と *veritas transscendentalis* とを区別している用語法<sup>19)</sup>を、独自の解釈を加えた上で継承したものと見ることができるが、このような場合に *transzendental* を「先験的」と訳したのでは、「論理的」と「先験的」との違いがどこにあるかは、少なくとも訳語を見ただけではまったくわからなくなる。なぜなら、「先験的」という語は「経験に先立つ」という意味だけしか含んでおらず、そして一般的論理学の真理も、経験に先立つ真理であるという点では、*transzendental* な論理学の真理と何ら違いはないからである<sup>20)</sup>。カントが一般的論理学と *transzendental* な論理学との決定的な違いと見なしているのは、現実中存在する対象一般への関係をもつか否かの違いであるが、「先験的」という語は「実在する対象に関わる」という意味をまったく含みえない点で大きな欠落を含んでいる。

(c) 本稿で我々が提案する「超越的」という訳語は、従来試みられてきた種々の訳語に比べて、最も工夫のない、単純に語源の意味をそのまま日本語に写しただけの直訳である。“*transzendental*”のように、用いる人によって含意やニュアンスが千差万別に異なる語は、そういう含意やニュアンスを訳語に反映させようとすると、どうしてもどこかで無理や偏りが生じるのを避けられない。特にカントのように、同一の書の中で伝統的な意味と自分独自の意味との間を不断に振幅させながらこの語を用いるような人の言葉を訳す場合には、一方の意味を訳語に表わせばもう一方の意味が訳語から消失する、という事態が不可避免的に生ずる。こういう場合は、訳語のレベルでは単純な直訳をするに留めておいて、個々の用例における意味は別途、研究や解釈のレベルで明らかにするのが最も妥当な方針だと我々は考える。

*transzendental* という概念を「超越論的」と訳しても「先験的」と訳しても、この概念の基底をなす「対象一般に関わる」という意味は消失してしまう。「先験的」という語は「経験に先立つ」という意味しかもたないし、「超越論的」という語は、解釈のし方によっては「対象一般への超越について論ずるような種類の認識に関わる」という意味まではもつことができるだろうが、しかし「対象一般への超越そのものに関わる」という意味をもつことは「論」の一字によって妨げられている。これに対し、「超越的」という訳語は、この場合の「超越」

が「対象一般への超越」を意味しているという理解が保持されている限りにおいて、transzendental という概念の基底的な意味を十全に表わす訳語となりうる。そして、対象一般への超越は、この超越がいかにして可能であり、いかなる限界を有するかということを経験する認識批判的認識が確立されている場合に限りて実現するものである、という理解が保持されている限りにおいて、「超越的」という訳語は「認識批判的」というカントが与えた新たな意味をも含意する訳語となりうる。なぜなら、「超越を遂行する」という言葉は、「認識批判に基づいて」という意味を必然的に含意することになるからである。

要するに問題は、transzendental という語をいかに訳すかではなく、この語が語義として直接に意味している「超越」という事柄をカントがいかを理解していたかを正確に捉えることなのである。この点が正確に捉えられてさえいけば、transzendental という語それ自体は「超越的」と直訳しておけば十分なのである。こうした方針をとることによって初めて、カントにおける transzendental 概念の一貫性を日本語に十全に表わすことができる。なぜなら、この概念のある種の用例だけしか的確に表現しない訳語を使うことは、それ以外の用例を、不適切な、いい加減な、自己矛盾した概念使用と見なして考慮の外に置く、という態度をほとんど不可避的に帰結するからである。

それだけではない。我々の方針は、特に transzendental を「先験的」と訳した時に決定的に失われてしまう哲学史的連関を、明示することができるという大きな利点ももつ。カントの超越的哲学がスコラ哲学の超越論思想を直接に継承したものでないことは我々もすでに指摘したが(2,b)、しかしこのことは、カントの超越的哲学がその思想内実において超越論思想と無関係であるということの意味するものではない。あらゆる対象一般にアプリアリに関わる概念とは、経験的な普遍性しかもちえない「類」概念の普遍性を超越する普遍性をもつ概念ということであるから、カントの意味で超越的な概念は、まさしくアリストテレス的な意味での「範疇」を、超越する概念にほかならない<sup>21)</sup>。実際、例えば超越論思想の確立者と言ってよいドゥッンス・スコトゥスが「存在者」(ens) という概念を「第一の超越論」と見なしており<sup>22)</sup>、つまり超越論を存在概念と見なしていることは、カントが超越的哲学を「存在論」と等置していることと、正確に符合している。存在論を哲学ないし形而上学の全体を支える「第一哲学」ないし「一般形而上学」と見なす思想系脈、アリストテレスから中世の超越論思想を経てヴォルフ学派に至るまで様々に形を変えながらも根本動向においては一貫して不変のまま継承されているこの思想系脈の中に、カントの思想を位置づけるためには、「超越的」という訳語を用いることが大いに寄与するであろう。

【注】

- 1) 九鬼周造『西洋近世哲学史稿 下』(『九鬼周造全集』第七巻、岩波書店、1981年) 42-44頁。なお引用文は新字新仮名遣いに改めてある。



- 2) 同上、41頁。なお、九鬼周造『時間の問題』(『九鬼周造全集』第三卷、岩波書店、1981年) 336-337頁も参照。
- 3) 『純粹理性批判』の頁づけは、慣例に倣って原著第1版をA、第2版をBと略記した上で、本文中に括弧でくくって示す。『純粹理性批判』以外のカントの著作の頁づけは、すべて原著初版の頁づけである。なお引用文中の強調は、特に断わっていない限り、すべて原文のままである。
- 4) 九鬼周造『講義 Heidegger の現象学的存在論』(『九鬼周造全集』第十卷、岩波書店、1982年) 17頁、註。
- 5) 筆者はかつて『哲学研究』第558号(京都哲学会編、創文社、1992年)所収の論文『カントにおける「超越論的」哲学の意味』で、『純粹理性批判』における *transzendental* という概念がもつ一貫性を明らかにすることを試みたが、そこでは筆者はこの語をいまだ「超越論的」と訳していたし、『純粹理性批判』序論の定義の訳し方を始め、いくつかの点で今から見れば誤った見解を述べていた。今回の本論文は、この誤りを修正する意図を含んでいる。なお、今回の論文を単独の完結した論文として理解可能にするために、上記論文ですでに論じられたことでも重複して述べざるをえなかった部分があることを注記しておく。
- 6) 高坂正顕『カント解釈の問題』(弘文堂、1939年) 4-5頁。高坂正顕『カント』(西哲叢書XV、弘文堂、1939年) 77-79頁。ただし高坂は、*transzendent* の方には訳語を与えていない。彼はカントの思想の全体像を叙述するはずの書の中でも *transzendent* という概念については言及しないままで済ませている。
- 7) 典型的な一例を挙げておこう。Weil es aber im Gebrauche derselben [= der sicheren Kennzeichen einer Erkenntnis] bisweilen leichter ist, die empirische Beschränktheit derselben [= der Urteile], als die Zufälligkeit in den Urteilen, oder es auch manchmal einleuchtender ist, die unbeschränkte Allgemeinheit, die wir einem Urteile beilegen, als die Notwendigkeit desselben zu zeigen, so ist es ... (B4) この文は、もしも "weil" を2度とも、そして "zu zeigen" を4度とも省略せず書き入れてあったとしたら、不恰好にはなるが、少なくともこんな構文の取りにくい文にはならない。
- 8) Norbert Hinske: *Kants Weg zur Transzendentalphilosophie. Der dreißigjährige Kant*, Stuttgart, 1970, S.28-29.
- 9) アリストテレス以来後期スコラ哲学に至る超越論思想の歴史を叙述した書としては、Hinrich Knittermeyer: *Der Terminus transzendental in seiner historischen Entwicklung bis zu Kant*, Marburg, 1920; Günther Schulemann: *Die Lehre von den Transcendentalien in der scholastischen Philosophie*, Leipzig, 1929 が豊富な原文引用をもつ一種の資料集として今でも有益である。現在では、*Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Bd.10 (Basel, 1998), S.1358-1436 (Artikel: "transzendental") が手頃であろうが、ただしこの辞書は(この項目に限ったことではないが)箇所によってかなり記述に癖が強い場合があるので注意が必要である。
- 10) E.g. Hans Leisegang: Über die Behandlung des scholastischen Satzes: "Quodlibet ens est unum, verum, bonum seu perfectum", und seine Bedeutung in Kants Kritik der reinen Vernunft, in: *Kant-Studien* Bd.20, 1915, S.403-421; Hinrich Knittermeyer: Von der klassischen zur kritischen Transzendentalphilosophie, in: *Kant-Studien* Bd.45, 1953/54, bes. S.113-119; Gottfried Martin: *Immanuel Kant. Ontologie und Wissenschaftstheorie*, 4.Aufl., Berlin, 1969, bes. S.139-142.
- 11) N.Hinske, a.a.O., S.9,45-47,74 Anm.247, usw.
- 12) Cf. Anton Bissinger: *Die Struktur der Gotteserkenntnis. Studien zur Philosophie Christian Wolffs*, Bonn, 1970, S.145.
- 13) Christian Wolff: *Vernünfftige Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt*, Frankfurt u. Leipzig, 1720.
- 14) Christian Wolff: *Der Vernünfftigen Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt, Anderer Theil, bestehend in ausführlichen Anmerkungen*,

- Frankfurt a.M., 3.Aufl., 1733, § 43.
- 15) E.g. Hans Vaihinger: *Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft*, 2.Aufl., 1922 (Nachdruck: Aalen, 1970), Bd.1, S.467, Bd.2, S.353; Norman Kemp Smith: *A Commentary to Kant's "Critique of Pure Reason"*, 2.ed. 1923 (reprint: Atlantic Highlands, 1992), S.76.
- 16) Aristoteles: *Metaphysica*, 1026a29-32.
- 17) アカデミー版カント全集の『純粋理性批判』の編集者ベンノー・エルトマンが、第2版のこの“überhaupt”は不注意の故に削除し忘れられたのかもしれない、と推測しているのは、第2版の語順だと“überhaupt”は“beschäftigt”にかかることになり、意味的に無用(überflüssig)な語となるからである。つまり彼もこの挿入節の位置の不自然さに問題を見出し、かつこの問題を原文改訂によって解決することを提案しているのである。Cf. *Kant's gesammelte Schriften*, Bd.3, hrsg. von der preußischen Akademie der Wissenschaften, Berlin, 1911, S.586. カントの原文に改訂を加えることでカントの思想を既存の常識のカント像の枠内に収めようとする悪習が19世紀以来どれほど数多く行なわれてきたかは、一世代前の Philosophische Bibliothek 版 (Raymund Schmidt 編集) の『純粋理性批判』の脚注が教えてくれている。問題の“überhaupt”が挿入節の前の“Gegenständen”にかかることを最初に見抜いたのは恐らくコーエンであるが、彼もまたこの不自然な挿入位置がとられた理由についてまでは考え及んでいない。Cf. Hermann Cohen: *Kommentar zu Immanuel Kants Kritik der reinen Vernunft*, Leipzig, 3.Aufl. 1920, S.18-19.
- 18) 黒積俊夫は「先験的」という訳語を用いるべきだと主張している。黒積俊夫『カント解釈の問題』(溪水社、2000年) 66-67, 81-85頁。
- 19) Christian Wolff: *Philosophia prima sive ontologia*, Frankfurt u. Leipzig, 2.Aufl., 1736, § 498 not.
- 20) 「先験的」という語が含むこうした問題は、とりわけ天野貞祐らのように“a priori”を「先天的」と訳す時に、顕著に表面化する。「先天的認識に関してのこの批判は先験的といわれる。[……] 先験的は直ちに先天的ではない、却って先天的に関すること、先天的認識についての認識である」という天野の文章を奇異に感じるのは私だけではあるまい。天野貞祐『カント 純粋理性批判——純粋理性批判の形而上学的性格』大思想家文庫17、岩波書店、1935年、30-31頁。
- 21) なぜなら、アリストテレスの意味での「範疇」の本質は「最高類」たるところにあると解しうるからである。Cf. Friedrich Adolf Trendelenburg: *Geschichte der Kategorienlehre*, Berlin, 1846. 邦訳: 日下部吉信訳『カテゴリー論史』(松籟社、1985年)、8頁。Eduard Zeller: *Grundriss der Geschichte der griechischen Philosophie*, Leipzig, 12.Aufl. 1920, S.201.
- 22) Cf. Allan B. Wolter: *The Transcendentals and their function in the metaphysics of Duns Scotus*, New York, 1946, p.10 (see: p.4-6). ただし、存在を超越の根源と見なす思想それ自体の起源はもちろんスコトゥスより古く、トマスやアルベルトゥスに、そして最終的にはもちろんアリストテレスにまで溯る。——ちなみに付言しておけば、ハイデガーが『存在と時間』で掲げている Sein ist das transcendens schlechthin という命題は、「存在は端的なる超越のそのものである」というスコトゥスの命題である(言うまでもなく transcendens の中性複数形が transcendentia である)。Cf. Martin Heidegger: *Sein und Zeit*, Tübingen, 15.Aufl. 1979, S.38. 辻村公一訳『有と時』(世界の大思想24、河出書房新社、1974年) 57頁。ハイデガーが「存在一般」(Sein überhaupt) の意味への問を『存在と時間』の主導問題としているのは、明らかにカントが「対象一般」に関わる認識を「超越の哲学」の問題としているのを、意識的に継承している。*Historisches Wörterbuch der Philosophie* の“transzendental”の項のハイデガーの部分 (Bd.10, S.1415-6) に、こういう関連がまったく言及されていないのは、重大な欠陥であると言わねばならない。アリストテレス、スコラ哲学、カント(いずれも『存在と時間』以前のハイデガーが特に重視して徹底的に研究した思想である) という道を経て継承されてきた問題を、現代哲学において真正面から受け止めて問うたのは、ハイデガーなのである。

【2006年9月7日受付, 10月27日受理】

## Transzendental-Begriff bei Kant

NAKAHARA Takashi

Das Wort "transzendental", ein tragendes Wort der kantischen Philosophie, übersetzt Kuki Shuzo mit dem japanischen Wort, das soviel wie "transzendontologisch" bedeutet, welche Übersetzung in der heutigen japanischen Philosophie-Literatur fast für selbstverständlich gehalten ist. Demgegenüber zeigt dieser Aufsatz, durch ausführliche Erläuterung der Definition, die Kant dem Begriff "transzendental" in der Einleitung der *Kritik der reinen Vernunft* gibt, daß die Basis dieses Begriffs in dessen vorkantischen Bedeutung liegt, wodurch er die Erkenntnis von den "Gegenständen überhaupt" bezeichnet, und daß das japanische Wort "transzendontologisch" als dessen Übersetzung ganz unangemessen ist, weil es nicht das Transzendieren der Erkenntnis zu den Gegenständen überhaupt, sondern eine wissenschaftliche Erkenntnis *über* diese Transzendenz bedeuten muß. Es ist für das richtige Verständnis der kantischen "Transzendental"-Philosophie entscheidend wichtig, deren Wesen darin zu sehen, daß sie das Transzendieren zu den Gegenständen überhaupt (d.h. zum Seienden als solchem) wirklich vollzieht und darum die Wissenschaft des Seins, d.h. die Ontologie ist, deren Tradition Kant in der *Kritik* bewußt aufnimmt. Die sogenannte "erkenntniskritische" Bedeutung des "transzendental" entstammt nur aus der Absicht, Ontologie nicht in eine Scheinwissenschaft verfallen zu lassen und durch die Prüfung der menschlichen Erkenntniskraft endgültig zu begründen.